

第2章 都市の将来像

1 都市計画の目標

1-1 都市計画の目標

本計画では、「第5次羽咋市総合計画」の将来都市像の考え方を踏まえ、都市計画の目標を次のように設定する。

自然と共生した賑わいあふれ、住みよいまち はくいの創造

「第5次羽咋市総合計画」では、市民・行政・事業者などが互いに連携し、豊かな自然環境を次世代に継承するとともに、将来の羽咋市を担う人びとを大切に育てていくことの必要性を示している。

また、市民ニーズから、雇用対策、少子化対策、高齢者福祉の推進、医療対策、協働によるまちづくりも考慮し、『みんなで築きます 活力にあふれ、人や自然を大切に
するまち はくい』を将来都市像（テーマ）としている。

本計画は、この「第5次羽咋市総合計画」の考え方を踏まえ、次の4つをキーワードとして、都市計画の目標を設定する。

「賑わいあふれるまち はくいの創造」

幹線道路整備により北陸新幹線や能登空港、能越自動車道などの広域交通体系とのアクセス性を高め、産業振興に寄与する雇用機会や定住環境を充実するとともに、自然、歴史・文化などの地域特性を活かして交流人口の増加に努め、都市内外の人・モノの交流により賑わいのあふれるまちを創造する。

「安全で安心な住みよいまち はくいの創造」

すべての市民が「住んでみたい」「住み続けたい」「住んで良かった」と感じる、誰もが安全で安心して暮らせる、定住を促す住みよいまちを創造する。

「自然と共生した美しいまち はくいの創造」

羽咋市には、眉丈山丘陵地、石動山系の山地、邑知潟など、豊かな自然環境を有しており、これらを保全し、次世代に継承するため、自然と共生したまちを創造する。

「市民・事業者・行政の協働」

羽咋市のまちづくりの推進にあたっては、市民・事業者・行政がお互いに連携し、協働して取り組む。

1-2 都市計画の基本方針

都市計画の目標を実現するため、都市計画の基本方針を次のように設定する。

1 雇用と交流を創出する能登の中核として賑わいあふれるまちづくり

- 隣接する市町との連携強化や産業の集積化、企業誘致の推進などにより、地場産業の振興と、新たな産業を生み出すまちづくりを推進する。
- 能登空港の開港や能越自動車道の整備など交通利便性の向上が進むなか、北陸新幹線の金沢開業を迎え、金沢・富山方面と能登地域をつなぐ地理的特性を活かし、自然、歴史・文化などの地域特性を活かした多様な人々が交流する場の創出、個性あるまちづくりを推進する。
- 気多大社などの社寺仏閣、市内に点在する古代遺跡など、歴史・文化を伝える地域資源の保全・活用を推進する。
- 羽咋市の美しい自然景観、これまで受け継がれてきた歴史・文化景観、人々の活気が息づくまちなみ景観などの保全・活用を推進する。

交流人口目標：平成31年までに211万人【平成21年値177万人の2割増】
（「羽咋市観光振興ビジョン」より）

2 すべての市民が住みよいまちづくり

- 人口減少社会等の状況を踏まえ、用途地域の見直しや新たな居住環境の整備、施設や地域資源、空地・空家など、既存ストックの有効活用により、市民が快適に暮らせる自然と調和した魅力あるコンパクトなまちづくりを推進する。
- 子育て環境や医療・福祉施設の充実、健康づくりの推進により、子供から高齢者までが安心して定住できるまちづくりを推進する。

3 都市を取り巻く里山里海と共生したまちづくり

- 防災対策、防犯対策の強化により、市民が安全・安心に暮らせるまちづくりを推進する。
- 幹線道路の整備、都市計画道路の見直し、公共交通の充実などによる新たな道路交通体系の構築、既存の公園・広場の適切な維持管理、下水道の整備促進などにより、市民の生活利便性の向上に寄与するまちづくりを推進する。
- 眉丈山系・石動山系などの山地・丘陵、千里浜海岸、羽咋川・子浦川・邑知瀧などの河川・瀧に広がる優良農地など、都市を取り巻く自然環境の保全を推進する。
- 世界農業遺産に認定された良好な里山里海の保全や、耕作放棄地の解消を推進するとともに、これらを有効活用したまちづくりを推進する。
- 市民や来訪者などが、資源を活用したふれあいと交流ができる環境づくりを推進する。
- 自然環境の保全や地球環境に配慮した循環型都市構造の構築を推進する。

4 市民・事業者・行政の協働によるまちづくり

- まちづくりの計画段階より、市民、事業者、NPOなどが参加しやすく、また、市民・事業者・行政の協働によるまちづくりが継続的に実施できる体制を構築する。
- まちづくりへの市民や事業者ニーズを都市計画マスタープランに反映する。

第2章 都市の将来像

1-3 将来人口

本計画では、おおむね20年後（平成42年度）の都市の姿を展望しつつ、中間年次となる平成32年度、目標年度となる平成42年の将来人口を設定するものとする。

将来人口について、上位計画である「第5次羽咋市総合計画」では、目標年次である平成32年の人口は、現在のままで推移すれば、20,200人まで減少することを見込んでおり、今後、若者の定住促進や雇用創出などの施策を推進し、人口の流出に歯止めをかけていくことによって、平成32年の将来人口を20,700人と設定している。

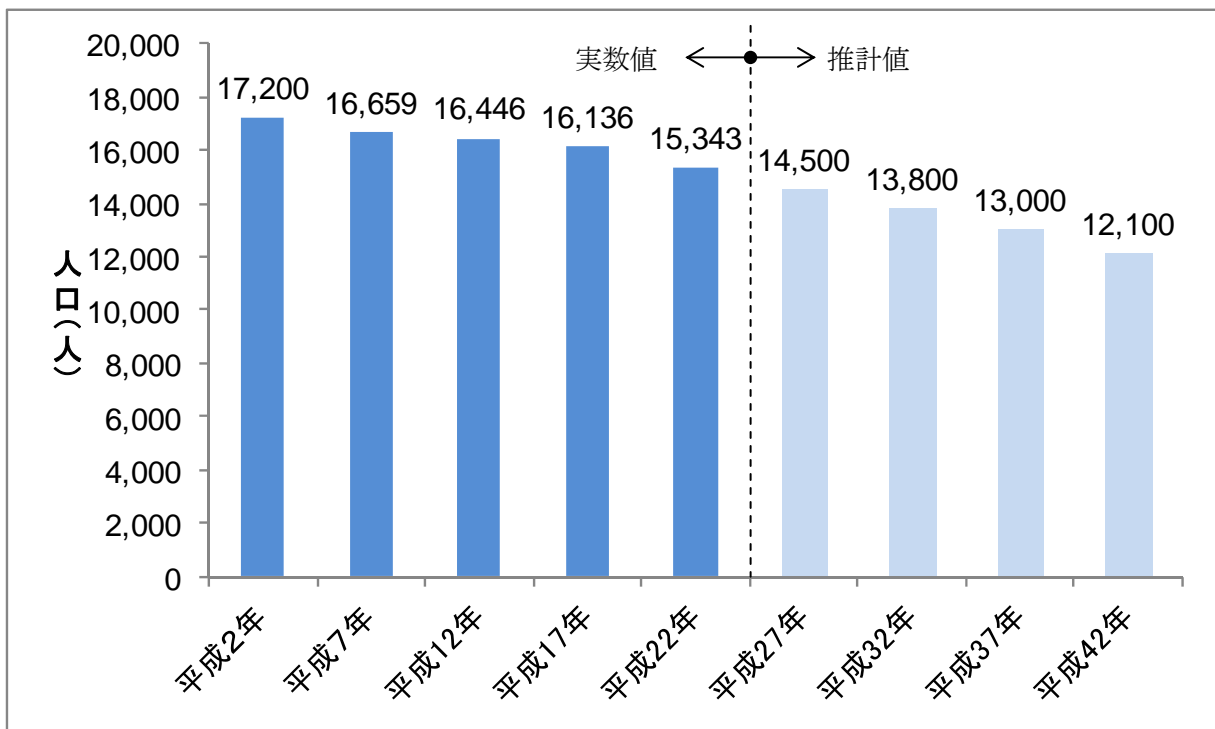
本計画においては、上位計画である「第5次羽咋市総合計画」の将来人口を踏襲するものとし、**平成32年の将来人口を20,700人（行政区域内）**と設定する。

また、平成37年以降の将来人口は、「第5次羽咋市総合計画」の推計値を参考とし、**平成42年の将来人口を18,200人（行政区域内）**と設定する。

本計画の対象区域である**都市計画区域の将来人口**については、**平成32年で約13,800人、平成42年で12,100人**と設定する。

（平成22年の都市計画区域内人口 15,343人／行政区域内人口 23,032人＝66.6%
をもとに按分）

図一 都市計画区域内における人口の推移



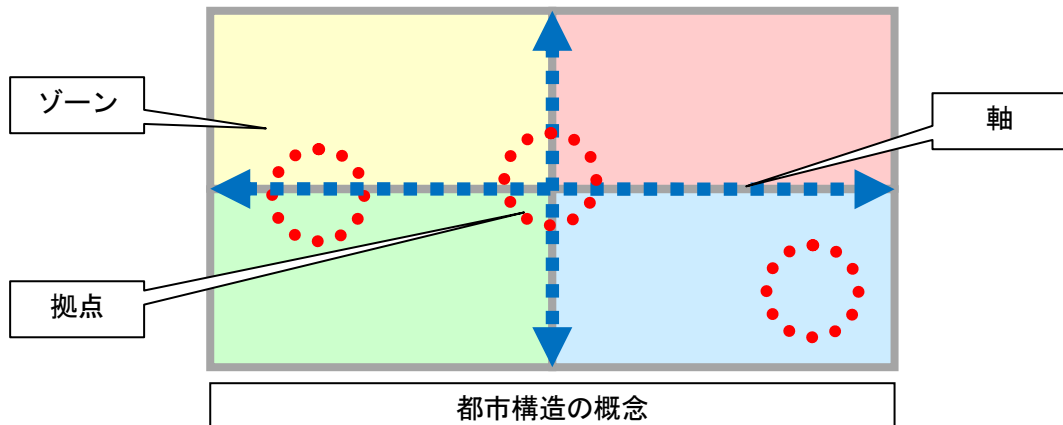
注：平成2年～平成22年までは国勢調査データ

平成27年～平成42年は「第5次羽咋市総合計画」の将来人口推計値をもとに按分

2 将来都市構造

2-1 将来都市構造

将来都市構造は、将来の都市の姿を表現するものであり、構成要素として、自然・地形的特性をもとに都市構造の面的広がりを成す「ゾーン」、現況の土地利用をもとに将来ニーズを見込んで集積を図る「拠点」、広域的な交流促進や拠点の連絡を強化し、都市の骨格を構成する「軸」を設定する。



1) ゾーンの方針

〔市街地ゾーン〕

- 用途地域が指定されている羽咋市の中心部を位置づける。
- 多様な人々が交流する羽咋市の中心部であり、都市機能の充実、魅力ある都市空間や快適で安心して暮らせる居住空間を創出するとともに、周辺の農地などと調和したコンパクトな市街地の形成を図る。
- また、将来的な土地利用を踏まえ、住宅地、商業・業務地、工業地としての純化を図るとともに、商業・業務地や工業地については、隣接する住宅地との調和を図る。

〔田園・集落ゾーン〕

- 市街地周辺の農地及び農地と調和して点在する集落を位置づける。
- 邑知地溝帯に広がる優良農地の保全を図るとともに、これら農地と調和した集落環境の維持を図る。また、農業・集落環境を保全・維持するため、適正な土地利用を誘導するとともに、集落における生活サービスの拠点の形成を図る。

〔自然環境ゾーン〕

- 眉丈山系・石動山系などの山地・丘陵、千里浜海岸沿いの緑地を位置づける。
- 山地・丘陵、海岸沿いの緑地など、貴重な自然環境の保全を図るとともに、自然を活かした憩いの場の創出を図る。

第2章 都市の将来像

2) 拠点の方針

〔中心都市拠点〕

- 市街地ゾーンの中でも JR 羽咋駅や商店街周辺を位置づける。
- 市民や観光客などが交流する本市の顔として、商業・業務施設、都市機能の集積により、商店街の活性化や賑わいと魅力ある都市空間を創出し、まちなか居住の促進を図る。

〔産業・交流拠点〕

- 商業施設などが集積する国道 415 号と国道 159 号羽咋道路の交差部及び邑知の郷公園周辺を位置づける。
- 交通の利便性を活かし、周辺環境と調和したロードサイド側の商業施設などの集積を図るとともに、市民等が交流する場の形成を図る。

〔工業拠点〕

- 寺家工業団地を含む大型工場が集中する柳田 IC 周辺部、本市南部の新保工業団地周辺を位置づける。
- 柳田 IC との近接や、国道 249 号へのアクセスなど、交通の利便性を活かし、工業施設の集積、新たな企業の誘致、既存企業の拡大などにより、雇用の創出を図る。

〔文化・スポーツ・教育・福祉拠点〕

- 羽咋市すこやかセンター、羽咋市歴史民俗資料館、コスモアイル羽咋、羽咋運動公園などが集積する一帯を位置づける。
- 福祉計画や防災計画などと整合を図りながら、文化やスポーツを通して市民等が健康推進及び交流する場として、また、災害時には避難場所として、施設機能の充実を図る。

〔観光・レクリエーション拠点〕

- 千里浜なぎさドライブウェイ、本市北部の眉丈台地自然緑地公園周辺など、観光やレクリエーション施設が集積する一帯を位置づける。
- 海岸や丘陵地の自然資源を保全し、これらの資源を有効活用しながら、市民や観光客が自然と親しむことができる拠点の形成を図る。

〔歴史・文化拠点〕

- 気多大社など、歴史・文化施設が集積する一帯を位置づける。
- 社寺仏閣、古代遺跡など、歴史・文化資源を保全するとともに、これらの資源を有効活用しながら、市民や観光客が本市の歴史と文化を学び・継承できる拠点の形成を図る。

3) 軸の方針

〔南北軸〕

- 羽咋市を南北に連絡する、のと里山海道、国道 159 号、国道 249 号などを位置づける。
- 南北に長い県土をつなぐダブルラダー道路の一翼を担う軸であり、金沢方面と能登地域の連絡機能を強化し、広域的な交流を促進するとともに、本市の中心都市拠点、工業拠点、観光・レクリエーション拠点、歴史・文化拠点の連絡強化を図る。また、本市の活力の維持・創出のための重要な軸として、商業や流通機能などの強化を図る。

〔東西軸〕

- 羽咋市を東西に連絡する国道 415 号、市道羽咋 286 号線などを位置づける。
- 能越自動車道とのアクセス性を高め、隣接する富山県や中京圏との広域的な交流を促進するとともに、本市の中心都市拠点や各拠点の連絡強化を図る。また、本市の活力を創出する重要な軸として、沿道土地利用のさらなる充実を図る。

第2章 都市の将来像

図一 将来都市構造図

